

仙北市は平成30年6月に「SDGs 未来都市」に選定されました。これを受けて様々な分野でゴールを目指して取り組んでいます。そこで、小中学生にもSDGsについて考えたり行動したりするきっかけをもってもらいたいと願い、SDGsバッジを市内小中学生と大曲支援学校せんばく校の児童生徒に贈呈することにしました。

12月10日は角館小学校において、「SDGsバッジ贈呈式」が行われ、同じく6年の村岡すみれさんがこれを受けて代表の言葉を述べました。2人は10月に行われた子どもサミットに学校代表で参加しており、SDGsについて学習しています。

角館小学校

SDGs バッジ贈呈式



児童代表の村岡すみれさん(中央)と田中絢菜さん(右)。バッジを受け取り、決意新たに。

SDGsのゴールには「すべての人に健康と福祉を」「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」「住み続けられるまちづくりを」などがあり、全部で17個設定されています。2人は自分たちが学んできたことや取り組んでいきたいことを、全校児童に広めているところです。村岡さんは全校児童に向けて、「皆さんはもうSDGsに興味津々だと思いませんか」と呼びかけ、二つのゴールについて紹介しました。「人や国の不平等をなくそう」「平和と公正をすべての人に」を取り上げ、「これらに対して私たちが取り組めることがある。それははじめをなくして、みんなが仲がよい小学校を創ることだ。今行っている『縦割り活動』や『あったかハート大作戦』も当てはまる。これを楽しんで行ってほしい。楽しめば笑顔になる。笑顔になればみんなが仲よくなる。私はそう思う。これからも全校で小学校をよりよくしていこう」と述べました。その呼びかけに大きな声で、低学年の児童たちが「はい」と答えていたのが、何ともほほえましく感じられました。



角館感恩講の加賀谷宏一理事長(右)から熊谷教育長(左)に手渡されました。

**善意ありがとこづかいます**  
**仙北市の子どもたちのために**  
**角館感恩講が市に寄付金**  
12月4日、一般財団法人角館感恩講(加賀谷宏一理事長)が奨学金事業に役立ててほしいと市教育委員会へ15万円を寄付しました。  
角館感恩講は、角館の有志が集まり、生活に困窮する人々の救済を目的に明治18年に設立されました。この寄付事業は、昭和56年度から地域の青少年の健全な育成のためにと続けられています。  
河原田次朗事務局長は「経済的に大学に行けないということがないように、安心して勉強ができる環境づくりに活用していただきたい。県外で勉強した後は、ぜひ仙北市に戻ってきてほしい」と話しました。

埼玉西武ライオンズ 育成ドラフト1位 赤上優人投手が抱負語る



赤上投手へ一問一答



- Q. 入団の報告ができた率直な感想は？  
A. 今までお世話になった方々に報告できて嬉しいが、恥ずかしさもあり緊張した。
- Q. 1月から自主トレが始まるが、それに向けて今後どのような準備をしていくか？  
A. プロは体格から何から違うので、しっかり食事を摂って体重を落とさないようにしたい。柔軟性もまだまだなのでストレッチをしてケガをしない体作りをしていきたい。
- Q. 具体的な目標は？  
A. 1日でも早く支配下登録になることを目標に開幕前にアピールできるようにしっかり準備していきたい。
- Q. 将来的に取りたいタイトルと目標の球速は？  
A. 取ることができるタイトルはすべて取りたい。球速は160kmを目標に上を目指して頑張りたい。
- Q. 目標とする投手は？  
A. 松坂大輔投手のようにすべての面で一流の投手になりたい。
- Q. 地元に戻ってきて変わったと感じたことはあったか？  
A. 会う人に声をかけてもらって応援してもらっていると実感し、やる気が出た。
- Q. 仙北市のどのような部分が今の自分につながっていると思うか？  
A. 地域の方々が温かく見守ってくれて、その分のびのびと野球をすることができた。
- Q. 地域の方々や子どもたちにプロとしてどんな姿を見せたいか？  
A. 小中学校と人数が少ない環境で野球をやってきたが、そんな中でもプロで活躍できるぞという姿を見せたい。

10月26日に行われたプロ野球ドラフト会議で、埼玉西武ライオンズから育成1巡目で指名を受けた赤上優人投手(角館高校卒・東北公益文科大学)が、このほど市役所田沢湖庁舎を訪れ、門脇市長に入団を報告、抱負を語りました。

赤上投手は、西木町松木内出身の21歳。松木内小学校3年生から野球を始め、スポーツ少年団・松木内ベアーズ(現西木FBC)で基礎を磨きました。松木内中学校時代は投手でしたが、角館高校では主に遊撃手としてプレー。3年時には主将を務め、夏の全国高等学校野球選手権秋田大会では準優勝に輝きました。

東北公益文科大学(山形県)に進学後は、肩の強さが監督の目にとまり、1年の秋に投手に転向。体作りに取り組んだ結果、球速もアップし、投手陣の柱になるまで成長しました。

「育成選手でまだまだプロの壁はあるが、それを乗り越える姿を見せることで、子どもたちや地域の方々の希望となる選手になりたい」と力強く語った赤上投手。

1月10日からは、いよいよ新人合同自主トレーニングが開始、背番号「121」をつけた赤上投手の新たなステージでの挑戦が始まります。



報告に臨む赤上投手(左)。入団報告には、生保内出身で元プロ野球選手の水澤英樹育成アマチュア担当(城西武ライオンズ球団本部チーム統括部編成グループ・右)も同席しました。